様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：３２６３６
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０４７２

研究課題名（和文）トルコ諸語におけるプロソディー分析

研究課題名（英文）The acoustic analysis of Turkish Languages

研究代表者
福盛　貴弘（Fukumori, Takahiro）

大東文化大学・外国語学部・准教授

研究者番号：００４０７６４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,700,000円、（間接経費）　1,110,000円

研究成果の概要（和文）：トルコ語のなぞなぞにおける韻律節において、以下のような音響音声学的特徴が析出された。(1)韻律節末尾における文末上昇調といった急上昇調と文末における自然下降調が韻律節を画定する際の主要な特徴となる。(2)韻律節には大中小の区別ができる。(3)中韻律節末で長音化が起こる。この長音化によって、急上昇調が生じている。(4)トルコ語はアクセントによって持続時間調整が行われているわけではなく、音節数に長さが左右される点から、トルコ語は音節リズムの言語だと言える。

研究成果の概要（英文）：This study describes the phonetic and phonological pattern in Turkish riddles. The unit to measure the duration in Turkish riddle has used the prosodic phrase. The aim of this study is to verify the isochronism between prosodic phrases and the durational adjustment which is caused by the number of syllable in the prosodic phrase. The results from this study are as follows:(1) The end of middle prosodic phrase has a rising tone at the sentence ending or a falling tone caused by declination. (2) The prosodic phrase is divided into large, middle, and small ones. (3) There is phrase-final-lengthening in the middle prosodic phrase of Turkish riddle. Since there is phrase-final-lengthening, a rising tone at the sentence ending occurs. (4) Turkish is a language of syllable-timed rhythm not stress-timed rhythm, since the word length is in relation to the number of syllable.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・音声学

キーワード：トルコ語　アクセント　イントネーション　韻律節　なぞなぞ　音響音声学　プロソディー

１．研究開始当初の背景

トルコ語におけるアクセントはこれまで最終音節にストレスがあれば基本アクセントで、最終音節以外の音節にストレスがあれば例外アクセントというように捉えられてきた。そして、ストレスがあるところが高くなるという特徴もこれまで指摘されてきた。こういった点から、トルコ語は強さアクセントで、ストレスがあるところが強く高く聞こえるとまとめられるのがこれまでの定説であった。（柴田(1948)、Kononov(1956)、Lewis(1967)、竹内(1970)など多数）

しかし、福盛(2009, 2010)の研究によって、トルコ語は音韻論的には高さアクセントの体系を有しているのではと指摘されている。Levi(2005)では、音響音声学的に基本周波数を計測し、下降動態に関して他の高さアクセント言語と類した特徴であることを部分的に指摘している。福盛(2009, 2010)では、例外アクセントに対して下がり目を設定することで、下がり目がなければ基本アクセント、下がり目があれば例外アクセントであると指摘し、体系の全体像を示している。

こういった流れの中で、高さアクセントとみなした場合に、基本アクセントにおける最終音節のＨ音調と、例外アクセントにおけるＨ音調が等質であるかどうかが問題となる。例えば、oda(部屋)は基本アクセントであるため語幹ではLHとなり、odaya(oda 部屋-ya～へ)ではLLHとなる。一方、banka(銀行)は例外アクセントであるため語幹ではHLとなり、bankaya(banka 銀行、-ya～へ)という語ではアクセント規則に従うとHLLとなるのだが、現実には3通りの音調があり、HLL～LLH～HLHという音調で実現する。この点から、最終音節におけるＨが必ずしも語に対して指定されるアクセントとしてのＨではなく、句末イントネーションとしてのＨである可能性を考慮する必要がある。

この問題を解決する１つの方策として、一定の条件下による談話を発話させ、アクセントによる指定かイントネーションによる指定かを解析することがあげられる。そこで、本研究では、複雑な要因が重畳する自然談話を扱う前段階の研究として、韻文におけるイントネーションを扱い、そのことによってイントネーションによってアクセントが消失する原因の一因を探りたいと考えている。

トルコ語の韻文においては、任意のフレームが設定される。一定のパタンで繰り返すという点で広義の韻文に属するなぞなぞに関して、トルコ語およびモンゴル語のフレームについて指摘した研究として城生(2008)があげられる。ここでは、母音調和による音形を主たる根拠としてアクセント単位より大きなフレームとしての韻律節を設定している。しかし、その韻律節に対してあらわれるイントネーションに関する特徴にはふみこまれていない。この研究については、代表者は調査段階から関わっているため、早くから気づいていたものの、当時はアクセントとの区別をどうするかについて整理がついていなかったため、ふみこんだ見解を示すことができなかった。この問題点を解消するための１つの方策として、本研究は位置づけられる。

２．研究の目的

本研究では、韻文における独特の音調に伴う音声学的特徴、主としてプロソディーを明らかにすることを目的とする。特に、トルコ語におけるイントネーションは、韻文において句末で一定のパタンを有し、このパタンがアクセントとイントネーションを区別するために重要な要因となる。そこで、短いながらも一定の構造を有する詩歌、ことわざ、なぞなぞなどの韻文を音響音声学的に解析し、プロソディーの特徴を析出することが期間内の課題となる。

これまでに示されてきた韻律節について、基本周波数やインテンシティや持続時間長といった音響音声学的解析によって捕捉することが大きな課題となる。その上で、トルコ語においては語末で高くなる現象と句末で高くなる現象の両者間における上昇の質的違いを、韻文における音響解析を通じて明らかにする。

また、この上昇調の特徴を捉えることで、フレームの繰り返しというパタンが母音調和における音形だけでなく、他のプロソディーによる要因からも捕捉できることを明らかにし、韻文におけるリズム構造を音響音声学的観点からも明らかにすることができると予測できる。

この点は、これまでの聴覚印象のみに頼った主観的方法による研究に対し、客観的方法によってその根拠をより強固にできると考えられる。

アクセントの消失については、例えば日本語においても百人一首と上毛カルタといろはがるたの三者ではそれぞれ読み方が異なり、百人一首ではほぼアクセントが消失し独特の音調だけで読み上げるのに対し、いろはがるたではアクセントが維持される。上毛カルタはこの両者の中間的な位置に立つ。この特徴を音響音声学的に析出して１つの参照モデルとしたい。そして、トルコ語においても、なぞなぞにとどまらず他の韻文も扱うことによって、イントネーションによるアクセントの消失に対して明らかになる部分があると考えられる。

さらに、トルコ語と同じトルコ諸語オグズ語群に属するトルクメン語において、トルコ語のアクセントやイントネーションの特徴がどの程度の類似点・相違点があるかも検証する。このことによって、トルコ語における高さアクセント説が、トルコ諸語における従来説である強さアクセント説の問題点を指摘できると考える。

３．研究の方法
(1)トルコ語の韻文の資料収集
　現地調査などをふまえて、詩歌だけでなく、広義の韻文に相当するなぞなぞやことわざなどの資料を収集する。

(2)トルコ語の韻文の記述調査、
　母語話者になぞなぞを音読してもらい、それを録音する。

(3)トルクメン語の基礎記述調査
　母語話者に基礎語彙調査を行い、それを録音する。

(4)音響解析
　録音資料を音響音声学的に解析する。基本周波数と持続時間長の解析を中心に行ない、上昇調の特徴を析出する。

(5)対照研究
　トルコ語のフレームと他言語のフレームの類似点・相違点を探る。また、トルクメン語の記述結果から、トルコ語高さアクセント説の有効性を再検討する。

４．研究成果
　トルコ語のなぞなぞにおける韻律節において、以下のような音響音声学的特徴が析出された。
(1)韻律節末尾における文末上昇調といった急上昇調と文末における自然下降調が韻律節を画定する際の主要な特徴となる。

(2)韻律節には大中小の区別ができる。

(3)中韻律節末で長音化が起こる。この長音化によって、急上昇調が生じている。

(4)中韻律節末が長くなる傾向はあるが、音節数に長さは左右されるので、中韻律節末の見た目の長さは必ずしも長くはない。

(5)中韻律節末の長音化と音節数による持続時間調整が、結果として中韻律節間の等時間性を生み出している。

(6)中韻律節間と大韻律節間では、大韻律節間の方が等時間性の精度が高まる。

(7)トルコ語はアクセントによって持続時間調整が行われているわけではなく、音節数に長さが左右される点から、トルコ語は音節リズムの言語だと言える。

(8)音節数という観点からは、ミクロにみると規則性がなくても、中韻律節を基本的単位として捉えると、7 音節ついで 5 音節を基調とする構造が多かった。また、音節構造によるパタンも少なからずみられた。

(9)母音調和の配列という観点からは、中韻律節でもいくつかのパタンがみられたが、大韻律節によってパタンがみられるものもあった。

(10)文法構造という観点からは、かなり意識して節末尾に同一の語や接辞を配置するといった何らかのパタンを作ろうとしているなぞなぞがみられた。

(11)脚韻という観点からは、24 例中 22 例がふまえていた。また、少ないながらも頭韻や中間韻をふまえたものもあった。

(12)AABA というルバーイーの詩の形式をふまえた例が 7 例あり、詩の形式をなぞなぞに反映させていることが垣間見られる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5 件）
①福盛　貴弘「アクセント観小考―アクセント核という用語を使わない理由―」『外国語学研究』15：157-162．大東文化大学外国語学研究科　2014.3．　査読有

②福盛　貴弘「トルコ語のなぞなぞにおける韻律節の持続時間長分析」『一般言語学論叢』16：1-40．　筑波一般言語学研究会　2013.12．　査読有

③福盛　貴弘「トルコ語の接続詞のアクセントについて」『北海道言語文化研究』11：63-76．北海道言語研究会　2013.3．　査読有

④福盛　貴弘「トルコ語のなぞなぞの構造分析」『一般言語学論叢』15：1-69．筑波一般言語学研究会　2012.12．　査読有

⑤福盛　貴弘「トルコ語のなぞなぞの音声分析」『一般言語学論叢』14：1-39．筑波一般言語学研究会　2011.12．査読有

〔学会発表〕（計　0 件）

〔図書〕（計　1 件）
①竹内　和夫・福盛　貴弘『トルクメン語入門　―キリル文字版―』大東文化大学外国語学部日本語学科　2012.2

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
福盛貴弘（FUKUMORI, Takahiro）
大東文化大学・外国語学部・准教授
研究者番号：00407644

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：